

創刊110周年記念

誇れるふるさと

24地区リレー

〈vol.3〉

〈小羽山② 課題とキーマン〉

少子高齢化、人口減少の波は例外なく小羽山地区にも押し寄せている。同地区を象徴する数多くの公営住宅も同様。入居者の高齢化が進み、孤独や孤立をめぐる問題への対策が急務となっている。

高齢者ら見守る体制を構築



シニア向けスマホ講習会で操作方法を学ぶ参加者（2月、小羽山ふれあいセンターで）

郷土愛育む冊子やスマホ教室も

同地区では、買い物支援や家の周りの草刈り、電球の取り換えなどの生活支援を担う「安親利他（あんしんりた）ネットワーク」が高齢者をサポートしている。同地区社会福祉協議会の小泓良雄会長（75）は「住民同士の声掛けなど、一人暮らしの高齢者を地域で見守り、孤独死を防ぐための体制を早急に構築する必要がある」と話す。

これらの課題解決や郷土愛の醸成を目指し、同地区コミュニティ推進協議会内に「ものしり博たづくり計画」が立ち上げられた。同地区在住で、SAKIDORIプロジェクト代表の真部尚志さん（49）を中心とした運営委員会が活動を引き張る。真部さんは「これからの地域を創造する人づくりが最も重要」と強調する。

昨年度は、市の助成金を活用し、地区の魅力を伝えるA4サイズの冊子を作製した。マニアックなスポットが多数収められており、冊子を片手にまち歩きを楽しむことができる。

子どもをはじめ、地域住民が郷土に対する関心を高め、誇りを持つことも目指している。冊子は1000部作製し、地元の小学校やふれあいセンターに設置した。第2弾の発行準備も進めている。

地域の情報発信の手法にも工夫が必要だとして、真部さんが中心のICT（情報通信技術）ソリューション部会が高齢者を対象としたスマートフォン教室なども実施している。

同地区自治会連合会の伊藤哲夫会長（58）は「ミカン畑を切り開いて生まれた小羽山にちなんで、地元の名物を開発したい」とも言う。

さまざまな立場の住民がスクラムを組み、未来を見据えたまちづくりを進めている。